

東北紀行

Tohoku Travelogue

第4号 / 2015年11月 / 編集：丸岡泰¹

ご挨拶

高木 亨²

福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの高木亨（たかぎあきら）です。2012年3月から福島県原子力災害被災地の支援研究を、産業面からおこなっています。

さて、東日本大震災と東京電力の原発事故からこの11月で4年8ヶ月となりました。福島県内は一見日常を取り戻した地域が大半になりました。この4～6月にはJRディスティネーションキャンペーン（DC）も開催され、期間中の入り込み観光客数は震災前に迫るものでした。しかし、双葉郡などの避難区域は未だ人間活動が制限されています。避難区域は徐々に解除されていますが、住民帰還は芳しくありません。政府は2017年3月末の避難指示解除を目論んでいます。状況は厳しいでしょう。

福島県の観光は、DCで大幅に回復したものの、震災前の入り込み観光客数にはおよびませんでした。また、避難地域周辺では、除染や廃炉作業に携わる方々、警察関係の方々の宿泊需要が未だあり、一般客の受入が困難な状況が続いております。関係者を受け入れている宿泊施設の経営は、震災需要がなくなったときに、大きな危機が来ます。そうした対策・支援も必要です。

2016年3月で震災から5年となります。そろそろ、避難地域での新たな「観光」を考える時期に来たのではないのでしょうか。被災地視察（観光）は、一部ではじまっています。また、筆者もJICA研修で海外の方々を原子力災害被災地に案内しています。Dark Tourismという視点もあり、被災地「観光」は、避難地域の復興に役立つものと感じています。課題は多々ありますが、「あの時から」何が起ってどうなっているのかを清濁あわせて見せること、そのためには何を残すべきかの議論を始めないといけない、そんな時期に福島は来ています。

支倉常長の見たヨーロッパ—その宗教と美術

松原 典子³

慶長遣欧使節が訪れた17世紀初頭のカトリック諸国における宗教と美術の概況は、「対抗宗教改革」と「初期バロック美術」という2つのキーワードによって説明しうる。16世紀初頭に始まった宗教改革に対し、カトリック教会が展開した独自の改革運動である対抗宗教改革の中核をなすのは、1545～63年に開催されたトリエント公会議である。教義や教会改革のあり方をめぐるとこの会議の決定事項は、プロテスタントとカトリックの違いを鮮明化し、以後のカトリック諸国の宗教ばかりか、政治、社会、文化などに広く影響を及ぼすことになった。美術においては、聖像を忌避するプロテスタントに対し、一般信徒教化のために美術作品を積極的に活用しようとするカトリック教会の戦略が、17世紀の「バロック美術」の推進力として作用した。教会に奉仕する美術に求められた、誰にでもわかる率直な描写、知性よりも感情に訴えかける迫真性やドラマ性といった要素は、そのままバロック美術の特徴に重なる。

スペインは、16世紀にはヨーロッパ政治の主役であると同時にカトリック信仰の強力な擁護者でもあり、国王カルロス1世、フェリペ2世の下で対抗宗教改革を牽引していた。ただしそれには、政治的覇権の確立と維持のために信仰擁護という大義名分を利用したという側面があり、その影響力は、世俗権力を超越した存在であったはずのローマ教皇選挙に介入するに及んだ。しかし、1614年に支倉常長らが目にしたフェリペ3世（在位1598-1621年）治下のスペインは、16世紀とは異なる様相を呈していた。

この頃スペイン政治の中枢にいたのは、支倉の代父となるレルマ公爵で、フェリペ3世とレルマ公爵の緊密な関係は、ヨーロッパにおける寵臣政治の先駆とされる。支倉が王への執り成しを求めてレルマ公爵に手紙を認めたのも、誰であれ同公を通さずして王に接近することは不可能という当時の状況に照らせば当然であった。この主従は、プロテスタント勢力との休戦によって一時的にスペインに平和をもたらしたものの、全般的には王国を衰退に導いた責任を問われるばかりで、従来十分な歴史研究の対象とされてこなかった。しかし最近はその再検

¹ 東北支部長 / 石巻専修大学

² 福島大学

³ 上智大学

討が進行中であり、特に注目されるのは、教皇をも足下に踏まえようとした前世紀の帝國的野心がフェリペ3世期には後退し、スペインとローマの力関係が逆転したという事実である。つまりスペインはもはや信仰を政治的野心達成の口実とはせず、教皇に忠実な一カトリック国へと転換したということである。

この力関係の逆転は、フェリペ2世時代から教皇庁が仕掛けた計略の成果で、そこにはスペイン宮廷の親ローマ派の臣下が関与したとされるが、同様に重要な役割を果たしたのは、教会刷新運動の流れの中で16世紀半ば以降のスペインに興隆した改革派修道会であった。これらの改革派修道会は「跣足派」、「隠修派」と称し、祈りと観想を通して神との合一を求める霊的生活をその根幹に据えた。最も有名なのは、アビラの聖テレサによって成立した「跣足カルメル会」であろう。改革派修道会の動きは、王権主導の教会改革を目指すフェリペ2世には歓迎されなかったが、宮廷周辺でも着実に支持層を広げていた。支倉が洗礼を受けたマドリードの修道院も、フェリペ2世の妹が設立した跣足派クララ会の修道院であった。教皇庁は改革派修道会を支持することで、スペインにおける自らの影響力を拡大していったのである。改革派修道会は、親ローマのフェリペ3世期には王権の庇護も得るようになる。

フェリペ3世期の美術はというと、これも長い間、文化の「黄金世紀」とされる16～17世紀のスペインでは例外的な停滞期として、等閑に付されてきた。最近はこの分野の再評価も進みつつあるが、それでも前後のフェリペ2世、同4世期の美術の壮麗さと比較するなら、確かに巨匠不在の地味さは否定しがたい。エル・グレコは使節到着の数か月前に没し、ベラスケスやスルバランら17世紀の主要な画家はいまだ修業中であった。とはいえ使節はマドリードでの逗留先、サン・フランシスコ修道院近くのエンカルナシオン学院聖堂を飾っていたエル・グレコの《受胎告知》(プラド美術館)のような大作を、間近に目にする機会があっただろう。

1615年秋、使節はローマで教皇パウルス5世(在位1605-21年)との謁見を果たした。パウルス5世は世俗権力に対する教権の優位性の回復に努めた教皇で、就任直後からカトリック諸国と激しく対立したが、スペインに関する限りその目論見がすでに達成されていたことは、先述の通りである。

パウルス5世はまた、新興の改革派修道会を承認する

とともに、ローマ主導の世界布教を推進した。教皇権の絶対化を目指す教皇が、15世紀末の新大陸発見以来、スペインとポルトガルに牛耳られていた布教活動を世俗権力から切り離し、ローマの指揮下でなされるよう企図したのは当然といえる。その教皇庁主導の世界布教で中心的役割を与えられることになるのは、改革派修道会とイエズス会であった。イエズス会はスペイン起源で、第3代までの総長はみなスペイン人であったが、1573年に就任する第4代以降、非スペイン人の総長が選出されるよう教皇庁が強く働きかけたのもそのためであった。

こうした状況下のローマに到来した慶長使節は、カトリック教会の世界的展開の何よりの証であり、それゆえに歓待された。支倉の肖像画とともに下賜されたパウルス5世の肖像画(仙台市博物館)は、使節への答礼であると同時に、日本に持ち帰られた後は、教皇権が東洋の島国にも及んでいることを証明するものとなるよう期待されていたはずである。

使節が訪れた1615年のローマでは、バロック美術が開花しようとしていた。1506年から続いたサン・ピエトロ大聖堂の本体工事が完了したのは、まさにその年のことである。同じ頃、パウルス5世とその甥で美術の大パトロン、シピオーネ・ボルゲーゼ枢機卿の庇護の下で研鑽を積んでいたジャン・ロレンツォ・ベルニーニはやがて、カラヴァッジョを嚆矢とするバロック絵画のリアリズム、ドラマティズムを、壮大な建築や彫刻において展開していくであろう。1640年代のベルニーニの代表作《四大河の噴水》は、注文主インノケンティウス10世の教皇権の普遍性を象徴的に示しているが、その30年程前にパウルス5世がアゴスティーノ・タッシらに描かせた、クイリナーレ宮殿の王の間(現・コラッツィエリの間)の壁画にも、同様の意図が込められていた。コンゴやペルシャの使節とともにそこに登場する日本の使節は、世界にあまねく知れ渡ったパウルス5世とローマ教会の栄光の証人として、その姿を永遠に刻みつけられたのである。

*2015年10月30日、石巻専修大学における講演要旨。

主催:東北支部/後援:慶長遣欧使節船協会/協力:石巻専修大学
(注)慶長使節とは、慶長18年(1613)、伊達政宗が家臣支倉長経[常長]をメキシコ・スペイン経由でローマに派遣したこと。現石巻市月の浦が出帆地とされる。支倉はスペインで受洗し、ローマで教皇に謁見し、7年後、教皇と自身の油絵肖像画を持ち帰国。ヨーロッパの宗教と美術を日本に伝えた。